



[最終講義] 経済学的世界観の強さ、限界、対応方向 私の経歴と考え方の発展

著者	岡部 光明, OKABE Mitsuaki
雑誌名	明治学院大学国際学部附属研究所研究所年報 = Annual report of the Institute for International Studies
巻	15
ページ	137-139
発行年	2012-12-01
その他のタイトル	The strength and deficiency of the economics-based world view and expected remedies in future research : A reflection of my experience over the last 45 years : Final lecture
URL	http://hdl.handle.net/10723/1460

2012年3月末をもって定年退職となる岡部光明教授（国際学部）の最終講義が同年1月11日、横浜キャンパス822号教室で行われた。当日は司馬純詩教授の司会によって進められ、阿部望国際学部長の挨拶のあと下記の講義が行われ、学部学生、大学院生のほか学外からも多数の聴講者があって盛況裡に終わった。

経済学的世界観の強さ、限界、対応方向 —私の経歴と考え方の発展—

岡部 光明

1. この最終講義は、下記のとおり第1部および第2部によって構成しました。第1部「私と明治学院大学」では、私の個人史に加え、私が明治学院大学に着任して以来4年半に亘る教育ならびに研究の取り組みを総括しました。そして第2部では、経済学という学問を私自身の職務経験ないし研究への取り組み方と関連させつつ、やや大きな視点から取り上げて展望しました。

第1部 私と明治学院大学

1. 私の経歴—明治学院大学との深い縁
2. 偉大な人物 J.C.ヘボン博士のこと
3. 明治学院大学での4年半

第2部 現代経済学の強さ、落とし穴、対応方向

1. 経済学の考え方と近年における展開
2. 単純な前提をおくことの強さ、そして問題点
3. 問題克服のための三つの要点
4. 私の社会観とその規定要因
5. 結論

2. まず「1. 経済学の考え方と近年における展開」では、最近約20年間における経済学の潮流を巨視的にながめ、そのエッセンスを平易に解説しました。続く「2. 単純な前提をおくことの強さ、そして問題点」では、現代経済学の「強さ」ないし有用性、ならびに「弱さ」ないし限界、をいくつかの例示をもとに指摘しました。そして「3. 問題克服のための3つの要点」では、2で述べた限界を克服する上で重要だと私が考える3つの要点を指摘しました。続く「4. 私の社会観とその規定要因」では、私がたどってきた経歴や経験が私の経済学研究に無意識のうちに大きな影を落としてきたことを反省するとともに告白し、今後の経済学のあり方について私が現時点で考えるスケッチを示しました。そして最後に、この講義の主要点を整理し、結論を述べました。

3. 主な結論は以下のとおりです。

- (1) 近年の経済学は、理論の精緻化あるいは体系化、新しい手法や概念の導入、他の隣接学問領域との連携、などが進み大きく発展してきた。また制度設計など、新分野への応用分析も拡大している。そして、従来連携を欠いていたマイクロ分析とマクロ分析がいまや理論的に統合されるに至っているのも、一つの大きな特徴である。
- (2) 経済学の近年におけるこうした発展の大きな理由は、人間行動に関する比較的単純な前提、つまり「人間は利己的な存在である」という仮定にある。そして、そのような単純な前提において分析する結果、経済学の論理には強さがあり、またその論理を人間の活動の他領域に適用することも活発化している。この現象は「経済学帝国主義」といわれることもある。
- (3) 経済学の研究者は、分析結果を単純に政策提言（とくに効率性のためには規制撤廃が必要という主張）に結びつける傾向がある。しかし、実際の政策運営に際しては、より多くの側面、すなわち公平性、社会の安定性、文化的価値への影響、なども加味して政策の適否を判断する必要がある。
- (4) 現代経済学の限界を克服するには、1 つは伝統的な世界観（市場か政府かという二分法）を越えた中間領域の役割を明示的に取り込むこと、つまり NPO・NGO、コミュニティなどの役割を取り組むことが求められる。もう 1 つは、経済主体に関する行動前提の見直しが必要であること、つまり人間の利他主義的動機も考慮する必要がある。それと同時に、利潤最大化を目的としない企業を制度上認知することなどによって新しい経済システム像を打ち立てることも必要である。
- (5) 私の経済観ないし経済学観は、これまで 45 年間にわたる学業や就業業務に大きく左右され、相当一面的であったと言わざるを得ないことに最近気づいた。しかし最近、ようやくそれから脱皮できつつある、と考えている。その理由は、市場主義的な主流派経済学に対して従来から何か違和感を潜在的に持っていたこと、最近 20 年間とても恵まれた研究環境を享受することによってそうした問題を考えることができたこと、そして、近年は人間の本質を考究する環境や機会にも恵まれたこと、などのためである。このことに私は深く感謝している。
- (6) 学生諸君は勉強に打ち込むことこそがその本務であり、その過程で発見する新しい智恵や自らの使命の自覚をもって、衰弱した今の日本社会に立ち向かっていってほしい。一方、私は「新しい経済学」の構築（これには“Do for others”ということの理論構築を含む）に取り組んで行きたいと考えている。そして、同僚の皆様にもそうした方向で研究をさらに発展されんことを期待したい。そして究極的には、個人の人間としての深化・成長が社会の調和と発展に結びつくような理論、ないしその実践方法の構築を目指して行こうではありませんか。

4. この日の講義の様子を示す写真を3枚掲載しておきます。



5. なお、この講義は、岡部光明著『現代経済学を超えて—私の経歴と考え方の発展—（明治学院大学最終講義）』という名称の書物として慶應義塾大学出版会から刊行されました。この書物の概要は出版社の下記ウェブページに掲載されています。

<http://www.keio-up.co.jp/np/isbn/9784766419450/>